



# 牛も勝負を諦めず、工夫を考える

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社中国支店 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

いよいよ暮れも押し迫りました。今年も様々な出来事がありました。その中でも特に印象に残ったイベントにロンドンオリンピックがあります。この大会で日本は合計三十八個という史上最多のメダルを獲得し、表彰台に立つ選手の表情がテレビに映し出される度に日本中が歓喜に沸きかえりました。その中には前の北京大会での敗戦の悔しさを乗り越えて再挑戦でのメダル獲得となった選手も少なくなく、勝負の厳しさを思い知るも、諦めずに今大会に向けて猛練習を続けてきた努力は、私たちの想像を絶するものだったと思います。

スポーツ競技だけに限ることではなく、子供の頃から勝つことを教えられ、入学試験や出世競争、ひいては日本全体が世界と競合をせざるを得なくなった現代社会では、私たちの日常そのものが勝ち負け争いの連続のようなものです。さらには人間だけでなく牛も社会的序列の中で、成牛のみならず



子牛でさえも、競合を勝ち抜くための術を考えて生きているようです。例えば個別にハッチにて哺乳瓶でミルクを与えられて飼育されている子牛を、日齢が上の子牛で構成する自動哺乳機設置の群に混ぜた場合の行動実験では、群に混ぜられた当日こそ哺乳機に行く回数は少なくミルク摂取量も激減しましたが、その翌日からは哺乳機に行く回数こそ依然少ないものの、その一回あたりの哺乳時間を長くするという行動の変化を認め、結果として一日の総摂取量を群に混ぜる前の量までに回復させたといえます。

生きるために幼い頭を必死に働かせていることに切なさも感じますが、これは現状に諦めず、状況に応じた工夫を考えることの大切さを示す教訓のようにも思えます。

ロンドン五輪に話を戻すに、金メダルを獲得した選手以上に輝いていた選手がもう一人思い出されます。それは五輪初の義足ランナーとして出場したオスカー・ピストリウス選手です。彼は障害のため生後間もなく両膝から下を切断しましたが、義足は靴と同じだと自分に言い聞かせて短距離走に打ち込み、数々の困難を超えて今回の出場を果たしました。準決勝で敗れたとはいえ、競技場を包む喝采は勝者以上のものでした。彼を支え励まし続けたのは「敗者とは最後にゴールする人ではなく、スタートに立つことを最初から諦めてしまう人のことを指すのだよ」という、十年前に亡くなった母親の言葉だったといえます。

2012年もあと数日を残すのみとなり、間もなく2013年という新しいスタートの幕が切つて落とされます。日本は今、世界との様々な競合の中で岐路に立たされ、酪農を取り巻く産業情勢も日々変化しています。こうした現状を憂い諦めるのではなく、私たちはその状況に応じた工夫を考えながら、来たる2013年を着実に勝ち進んでいきましょう。